

# ユニバーサルデザイン（UD）教育の取り組み ー北海道ユニバーサル上映映画祭での実践よりー

橋本 和幸<sup>1</sup> 島 信一郎<sup>2</sup> 鈴木 克典<sup>3</sup>

2006年より北海道北斗市において開催している北海道ユニバーサル上映映画祭は、上映作品に日本語字幕、音声ガイド、ミュージックサイン等（以下、総称する場合は、ガイドとする）を付けて上映する映画祭である。この映画祭において、小・中・高校生を対象にしたワークショップ（以下、Ws）を開催してきた。小・中・高校生が、映画祭に主体的に参加する中で、いくつかの視点から、UDについて学び、体験する場としてきた。当映画祭を通じた、これらの実践の取り組みを紹介する。

キーワード：ユニバーサルデザイン(UD)教育、ユニバーサル上映、小・中・高生ワークショップ

## 1. はじめに

北海道ユニバーサル上映映画祭では、当初から、すべての上映作品にガイドをつけることで、視覚障がい者、聴覚障がい者など映画鑑賞そのものにバリアがある方、また、手話通訳、要約筆記（文字通訳）を用意し、会場には、補聴援助システム（磁気ループ席）、車イス席、託児所を設置し、身体障がい者、子どもを預けることが必要な方など会場にバリアがある方も映画を楽しめるような上映環境を用意して開催している。これらは、障がい当事者への補完的な対応ではなく、UD仕様の環境をあらかじめ用意することで、一人ひとりを最初の段階から排除することなく、そこに参加することを保障するためのものである。さらには、健常者も含めて同じ環境で映画を鑑賞することによる「感動の共有」と他者を認め合うことへの「気づき」を目指している。

当映画祭では、映画上映の他、シンポジウムなどを開催する中で、ユニバーサル上映の意義やUD社会の実現に向けて、映画上映を通して文化芸術分野のUDに取り組んできた。また、このような環境を学齢期から経験することの意義をWsを開催することで、実践してきた。

第10回目の開催となる今回の映画祭に際し、今まで取り組んできた小・中・高校生の

Wsを紹介し、UD体験の成果を考えたい。

## 2. Wsの内容

小学生、中学生は、第5回映画祭(平成22年)から、高校生は、第3回映画祭(平成20年)から、開催してきた。以下、テーマ別に紹介する。

### (1)小学生Ws

テーマ「ユニバーサルをさがしてみよう！」小学生にUD学習をしてもらい、身近なUD探しと新たなUDを考えてもらうものである。

1)第5回映画祭：市内小学校1校、31名参加。「見つけた！ユニバーサルデザインー身の回りのユニバーサルデザインをさがしてみよう。」の課題を書いたワークシート（図-1）を

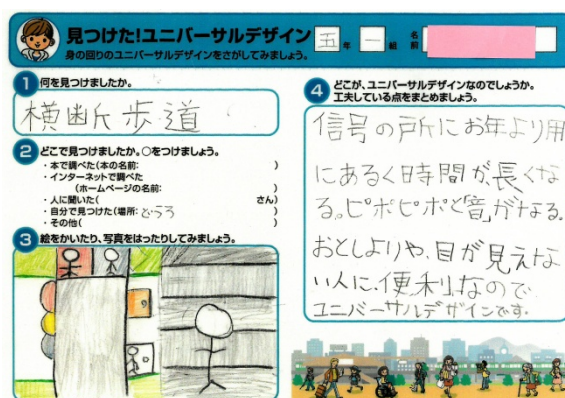


図-1 第5回映画祭ワークシート(作成例)

個人で取り組み、その後、「私の考えたユニバーサルデザイン」(図-2)を発表した。合計28点で、障がい当事者のみを対象とせず、だれで

<sup>1</sup>北海道ユニバーサル上映映画祭実行委員会・〒040-0003 北海道函館市松陰町 2-6 TEL0138-55-1855

<sup>2</sup>インクルーシブ友の会・〒042-0932 北海道函館市湯川 2-29-28 TEL0138-57-3157

<sup>3</sup>北星学園大学・〒004-8631 北海道札幌市厚別区大谷地西 2-3-1 TEL011-891-2751(1812)

もわかりやすいデザインなどの提案が、自由な発想で行われた。

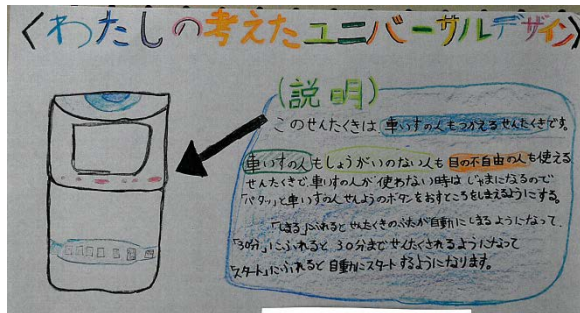


図2 第5回映画祭発表シート(発表例)

2) 第6回映画祭: 市内小学校1校、38名参加。個人のテーマとして、「困っている人を助けよう! 困っている人を、ユニバーサルデザインで助けましょう。」に取り組んだ。(図-3/4)

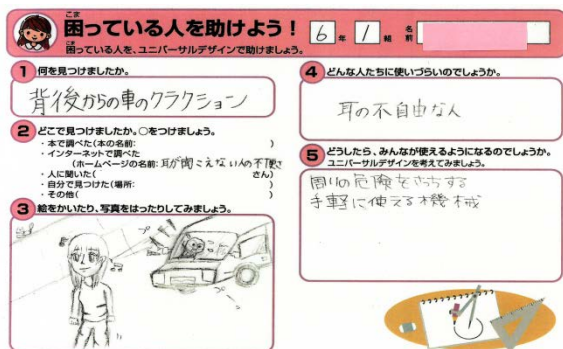


図3 第6回映画祭ワークシート(作成例)

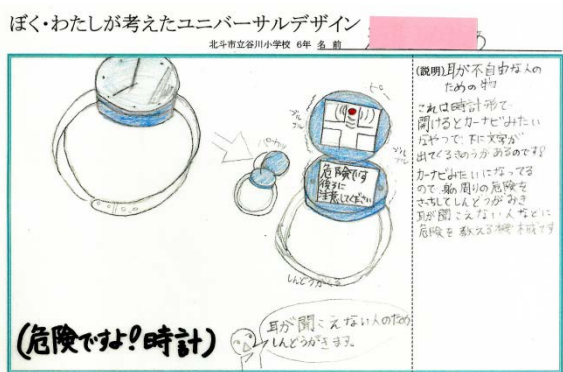


図-4 第6回映画祭発表シート(発表例)

そして、「聴覚障がい」、「肢体不自由」、「視覚障がい」、「妊婦さん」、「幼い子どもたち」、「高齢者」の6グループで、「ぼく・わたしが考えたユニバーサルデザイン」の提案をした。尚、第5回に参加した小学生の30名が第6回にも参加している。

3) 第7回映画祭: 市内小学校2校、27名参加。

「〇〇でも使いやすいグッズ」(〇〇:「お年寄り」、「小さい子」、「誰でも」)、「地域のユニバーサルデザイン」、「ユニバーサルデザインとは何か」をテーマとして、発表した。(図-5)

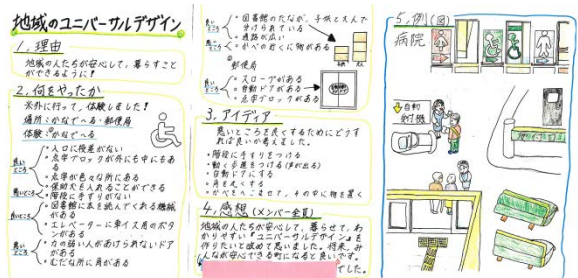


図5 第7回映画祭発表シート(発表例)

4) 第8回映画祭: 市内小学校1校、26名参加。ボランティア探検隊ワークシート(図-6)を元に、一人ひとりがワークシートを作成した。

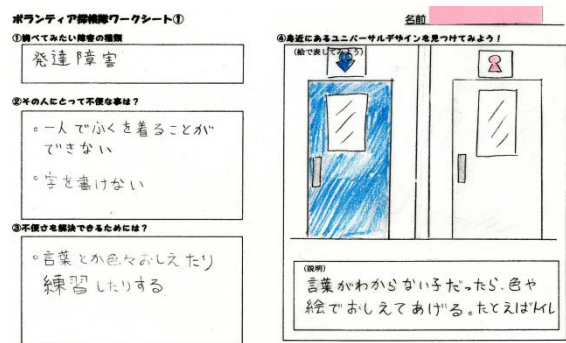


図-6 第8回映画祭ワークシート(作成例)

更に、図-6中①の障害の種類「聴覚障害」「視覚障害」「肢体不自由」「発達障害、知的障害」の4テーマについて、「私たちが考えたユニバーサルデザイン」をグループ毎に発表した。

5) 第9回映画祭: 市内小学校1校、28名参加。「肢体不自由」「発達障害」「聴覚障害」「視覚障害」の4テーマをグループに分け、「どんな障害」「その障害の人たちが不便なこと・困っていることは」「自分たちが考えたユニバーサルデザイン」を発表した。

(2) 中学生Ws

テーマ「ユニバーサルをかんじてみよう!」視覚や聴覚などに障がいを持つ人と一緒に映画を観てもらい、コミュニケーション等を体験してもらおうものである。

第5回~第9回映画祭で、参加校は、のべ7

校、参加人数は、のべ40名であった。

### (3) 高校生Ws

テーマ「ユニバーサルをつくってみよう！」

聴覚障がいや視覚障がいの方に、映画を観てもらうための環境をつくる体験をしてもらう。実際の映画作品で、日本語字幕や音声ガイドを作ってもらい、映画祭で、オペレートもする。第3回～第9回映画祭で、参加校はのべ13校、参加人数は、のべ59名の参加であった。

### (4) 映画祭感想文表彰

感想文コンクールを映画祭にあわせて、第6回映画祭（平成23年）より開催している。主に、小・中・高校生Wsに参加した児童・生徒に感想文を書いてもらい表彰している。それぞれのWsにおいて体験した成果を感想文という形で文章にすることで、より経験が醸成される。

第6回から第9回までの映画祭で、小学生は2校延べ118名、中学生は2校35名、高校生は3校23名の参加であった。

## 3. Wsの目的と成果

### (1) 小学生Ws

小学生Wsでは、まず、障がい当事者が、学校に出向き、子供たちの質問に答えるなどのふれあう機会を設ける。その後、グループに分かれてテーマを決め、地域の図書館や郵便局などを訪問して調査やアンケートを実施するなど、それぞれのテーマに沿った調べ学習を行っていく。この自主学習とグループワークを何度か重ねていき、壁新聞形式のグループ発表原稿を作成する。更に、個々の独創的なUDを考案していく。

その中では、子どもたちの心の変化として、他者を理解し受け入れていこうとする過程で、自然と利他的な意識が芽生え、それを他者に受け入れてもらえるという経験により、自己肯定感が養われる。あわせて、違いの存在と向き合い、優劣ではなく対等として尊重しあう経験から、大きな人間観が養われる。一方、障がい当事者の心の変化としては、子どもたちの素直な心の変化を目の当たりにして、自らの存在価値

を認識し、社会の構成員としての喜びと責任感及び役割について、改めて意識する貴重な機会として捕らえている。

### (2) 中学生Ws

中学生Wsでは、中学生と障がい当事者が、会場で初顔合わせの後、ペアとなり、一緒に映画を鑑賞する。自己紹介の後、視覚障がい者のガイドサポートや車椅子介助、筆談や空書（聴覚障がいコミュニケーション手段）などの実体験を必要に応じて行い、受付から会場まで移動して隣同士の席で映画鑑賞による感動を共有してもらう。その中で、UDの有用性や普遍性など、様々なことを考えると共に、心に自然と湧き上がる優しい気持ちと出会ってもらうことを狙いとしている。

### (3) 高校生Ws

高校生Wsでは、実行委員会で用意した映画作品を素材とし、耳が聞こえない人・目が見えない人と一緒に鑑賞できるようにするにはどうしたら良いかという課題を与え、高校生たちが自分たちで考え、1ヶ月ほどを要して日本語字幕や音声ガイドの作成に取り組む。当日は実際に音声ガイドのナレーションや字幕のオペレートも担当して、上映を提供する側の実体験もしてもらう。

発表当日は、小・中・高校生それぞれに壇上で、成果や感想を発表して、会場の障がい当事者たちからの評価や感想等のコメントをもらう。

### (4) Wsによる成果

小学生、中学生、高校生の各学齢で「さがしてみよう！」「かんじてみよう！」「つくってみよう！」という異なる視点から、課題に取り組むことで、自身の成長を確かな手ごたえとして捉え、毎年自主的に継続参加を希望する子どもたちや、子どもたちの中には、将来は福祉の道を目指したいと夢を抱いてくれる子ども数名現れている。また高校卒業後に、映画祭の運営ボランティアとして参加して、Wsの継続などに力を発揮している子どももいる。

以上のことから、子供たちは、自らの心を優

しく成長させていくことを求めていることが明らかに分かる。また、障がい者は自身の役割を捜し求めていることも同様である。このことから、この取り組みは、発達段階に応じた子どもたちの心の成長と次世代育成の社会的側面から、大いなる教育的価値が認められる。同時に、障がい者福祉の観点からは、障がい当事者が教育現場で活躍する可能性についての示唆を与えてくれるものといえるのではないだろうか。すなわち、双方から有用であり、取り組みの広がり可能性を示しているものと考えられる。

さらに、Wsに参加した実体験を感想文という形で文章にしてもらうことで、体感した経験がより、深いものとして児童・生徒の中に残り、今後の社会生活上で役立つと思われる。一部感想文の引用から、成果を紹介する。

中学生Wsに参加した1年女子生徒の感想文より（抜粋）

「私は、このワークショップに参加する前、障がいがある人の事を「可哀相だ。」と思っていた。しかし、実際に視覚障がいがある〇〇さんと交流し、サポートをして、その考えは180度変わった。このワークショップで、私は初めて障がいのある方のサポートをした。目が全く見えないなど、どのくらい怖く、どのくらい暗いのか想像がつかず、どのようなサポートが必要なのかさえわからない。しかし、目が見える私がペアになった〇〇さんの目にならなければいけない。私の目に入った、危険な物や人混みなどを、ひとつひとつ〇〇さんに伝え、フリーマーケットや、廊下を一緒に進んで行った。ゆっくり歩きながら、〇〇さんが住んでいる場所や、私の学校や部活の話をした。（中略）

目が見える私達がすべきこと。それは、ハンディキャップを気にせず、安心して暮らせる世界をつくることだと思う。そのためにはまず、ハンディキャップをもっている人達がどのような生活をしているか、どのように感じているかを知ることが大切だと思う。私は今まで、そんなことを知ろうともせず、気づきもしなかった。

しかし、このワークショップに参加し〇〇さんと出会って、今までの私がどんなに気づいていなかったかを知った。「映画は見るだけのものではない。音楽は聞くだけのものではない。心と体で感じるものだ。」と〇〇さんは言った。今では、その通りだと心から思える。障がいがある人も、私達と同じように映画や音楽を楽しむことができる。「可哀相だ。」などと思っはいけない。どんな人も、同じものを楽しむことができる。このワークショップに参加し、私は大きなことを知ることができた。

#### 4. 終わりに

今の社会の中では、学校教育の場も含めて、障がい当事者と出会う機会は、多くない。様々な立場で、ともに時間を過ごす経験は、包摂社会を目指す上では、貴重なものと考えられる。特に、学齢期の体験は、重要であろう。当映画祭では、映画祭という場と映画という媒体を介して、Wsへの参加という形で、UDを知る機会をつくっている。小学生、中学生、高校生のそれぞれのテーマで、課題に取り組み、形として仕上げることで、自身の経験として記憶に残る。また、発表することで、成果を確認することができる。さらに、発表し、感想文という形で文章にすることにより、より深い体験とすることができる。

#### 【謝辞】

Wsを開催するにあたり、特段のお力添えを賜りました、北海道教育庁渡島教育局様、北斗市教育委員会様及び関係各位、参加校の校長及び教頭、担当教諭の皆様、児童・生徒の皆様にご心より感謝申し上げます。映画祭感想文表彰を主催下さいました 函館グリーンライオンズクラブ並びに高校生以下無料招待のチケット協力を賜りました、北斗市商工会様、北斗市観光協会様、北斗市金融協会様、上磯ライオンズクラブ様、北斗ロータリークラブ様、函館グリーンライオンズクラブ様にお礼申し上げます。Wsの運営にご協力下さいました日本福祉のまちづくり学会北海道支部様に、感謝申し上げます。